

スナメリ 日本周辺

(Narrow-ridged Finless Porpoise, *Neophocaena asiaeorientalis*)



スナメリ (鳥羽水族館提供)

最近の動き

商業捕獲は行われていない。混獲が報告されている。従来、世界各地に生息するスナメリは1種からなると考えられていたが、主として背面隆起部の形状の違いにより *Neophocaena phocaenoides* と *N. asiaeorientalis* の2種に分かれるとの説が提唱された (Jefferson and Wang 2011)。本報告では日本周辺のスナメリを *N. asiaeorientalis* として扱う。

利用・用途

試験研究等。

漁業の概要

本種は現在、捕獲対象とはなっていない。しかし、戦後の一時期、瀬戸内海地方などで油を採取する目的で捕獲されたことがあった。また、水族館での展示に供するため、まき網による捕獲が行われたこともある (大隅 1998)。

西九州の橘湾では、かつて、秋～冬に小型定置網によって多くの個体が混獲されていた。1963年9月下旬～10月下旬の1か月間に橘湾だけで50頭以上の混獲が記録されたが (水江ほか 1965)、漁法の変化により現在このような多数の混獲は認められない (Kasuya and Kureha 1979)。しかし、その後も混獲は続いており、1985年から92年にかけての8年間に、有明海・橘湾で67頭、大村湾で9頭、関門海峡周辺で8頭が混獲された (白木原 2003c)。他の海域でも混獲は起こっている (石川 1994)。国際水産資源研究所のとりまとめによると、2006～2013年の8年間に112頭の混獲報告があった (14.0頭/年、岩崎 2007-2011、木白 2012-2014)。

本種は水産資源保護法に基づく捕獲禁止対象種である。2004年11月に伊勢湾において、水族館における学術研究及び教育展示を目的に9頭の特別採捕が行われた。

生物学的特性

スナメリは、頭が丸く、くちばしや背鰭がない。成体の体色は淡い灰色である。歯鯨亜目ネズミイルカ科に属し、台湾海峡以北の中国沿岸から朝鮮半島を経て日本にかけての沿岸海域に分布している (Jefferson and Wang 2011、図1)。中国には、揚子江に周年分布する淡水性の本種がいるが、我が国には淡水域に定住するものはいない。また、壱岐・対馬・南西諸島での出現情報は極めて乏しいことから、我が国と中国・韓国との間で個体の交流は稀なものと考えられている。南西諸島における初の出現報告が2004年2月に沖縄本島でなされ、遺伝解析の結果、当該個体は中国沿岸域から迷入

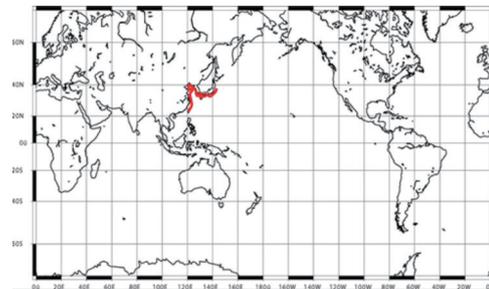


図1. スナメリ (*Neophocaena asiaeorientalis*) の主な分布域 (Jefferson and Wang 2011 に基づく)

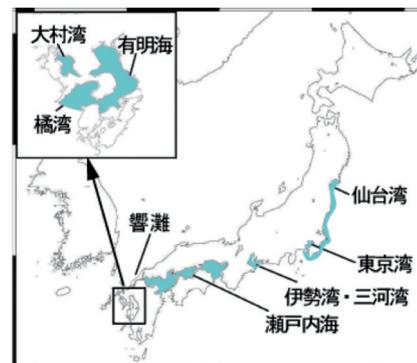


図2. 日本におけるスナメリの主な分布域 (Shirakihara *et al.* 1992 を改変) 仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～響灘、大村湾、有明海・橘湾。

したものと同定された (Yoshida *et al.* 2010)。日本において本種は、仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～響灘、大村湾、有明海・橘湾の 5 海域に主に分布し、その他の海域への出現は稀である (Shirakihara *et al.* 1992)。日本における主分布域を図 2 に示す。

各海域のスナメリに対し、様々な地方名が存在する。本種は、仙台湾～東京湾ではスナメリ、伊勢湾・三河湾ではスザメ・スッコザメ、瀬戸内海～響灘ではナメクジラ、ナミソ、デゴンドウ、大村湾や有明海・橘湾ではナミノウオ、ナミウオ、ボウズウオなどと呼ばれている (白木原 2003a)。

これら 5 つの海域間で、外部形態 (白木原 1993)、骨格形態 (Yoshida *et al.* 1995)、繁殖期 (Shirakihara *et al.* 1993)、mtDNA 塩基配列 (Yoshida *et al.* 2001) に違いが見いだされており、本種は各海域で異なる 5 つの系群に分かれていると考えられている (Yoshida 2002)。近年の航空目視調査の結果、瀬戸内海で発見が不連続であることが報告されており、海砂の採取による生息域の分断化の可能性が指摘されている (Shirakihara *et al.* 2007)。

群れ構成頭数は概ね数頭以下で、2 頭群れの多くは母親と新生仔からなる (Kasuya and Kureha 1979)。しかし、時に 100 頭にのぼる大きな群れを作ることもある (Yoshida *et al.* 1997)。

出産期は海域で異なる。伊勢湾・三河湾や瀬戸内海では 4 月をピークとした春から夏にかけて出産するのに対し、有明海・橘湾では秋から春にかけて出産する (白木原 2003c)。平均出生体長は 80 cm 程度である (白木原 2003c)。妊娠期間は 11 か月程度であり (Kasuya *et al.* 1986)、その後 6～15 か月ほどの授乳期間が続く (Kasuya and Kureha 1979)。ただし、生後 6～12 か月頃から摂餌を始める (Jefferson *et al.* 2002)。繁殖周期は通常 2 年 (2 年に 1 回仔を産む) と考えられている (Kasuya 1999)。

性成熟は、太平洋岸及び瀬戸内海に生息するスナメリについて、雄が 3～9 歳 (体長 145～155 cm)、雌が 4 歳以下 (体長 140 cm 以下) で到達する (Kasuya 1999)。また、有明海・橘湾の本種については雄で 4～6 歳 (体長 135～140 cm)、雌で 5～9 歳 (体長 135～145 cm) である (Shirakihara *et al.* 1993)。

体の伸長は 14～23 歳の間止まる (Yoshida *et al.* 1994)。今までに観察された最大体長は、太平洋岸及び瀬戸内海に生息するスナメリの雄で 207 cm (中村ほか 2003)、雌で 180 cm (Kasuya 1999)、有明海・橘湾で観察された値 (雄 175 cm、雌 165 cm) (Shirakihara *et al.* 1993) よりも大きい (図 3)。

有明海・橘湾では、雌雄ともに 23 歳の個体が得られている (Shirakihara *et al.* 1993)。伊勢湾で捕獲された体長 161 cm の雄個体その後 28 年 10 か月の間水族館で飼育された例のあることから (古田 2003)、環境によっては 30 年以上生きる個体もあるものと考えられる。

スナメリの食性研究は、主として大村湾及び有明海・橘湾で行われている (Shirakihara *et al.* 2008)。本種は、大村湾ではハゼ類やトウゴロウイワシなど魚類を主に捕食する一方、

有明海・橘湾では、イワシ類、テンジクダイ科、ニベ科、コノシロなど魚類とあわせタコ類、コウイカ科、ジンドウイカ科など頭足類も多く摂餌していた。また両海域では、エビ類やシャコなど甲殻類も利用されていた。伊勢湾・三河湾では、本種はイカナゴ、イカ類、甲殻類を摂餌していたとの報告がある (片岡ほか 1977)。飼育下における本種の 1 日平均摂餌量は、体重 60 kg 程度の雌雄各 1 個体に対する観察例から体重の 5.2～5.8% と見積もられている (片岡ほか 1967)。

本種を捕食する生物には、さめ類があげられる。沖縄近海で捕獲されたホホジロザメの胃内から 2 頭のスナメリが発見された (Kasuya 1999)。また漁業者によると、シャチが出現すると付近からスナメリが姿を消すとのことから、シャチも捕食者となっていると考えられる。

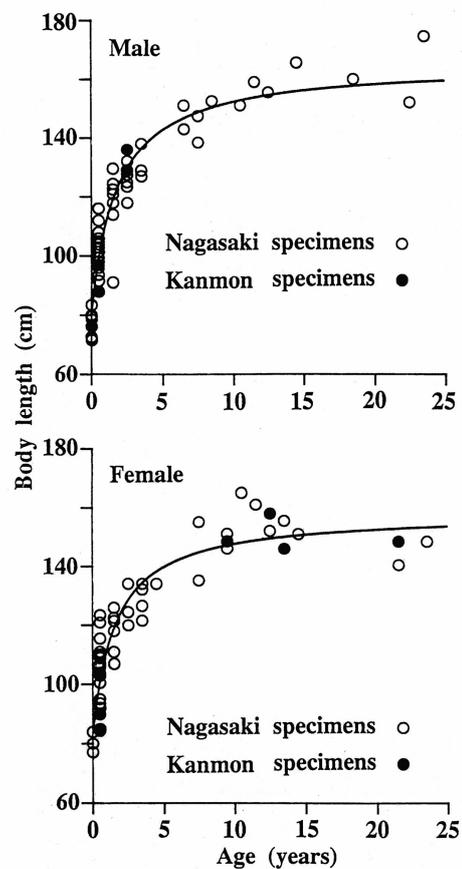


図 3. スナメリの成長曲線 (長崎県・関門海峡周辺の個体より) (Shirakihara *et al.* 1993 を改変)

資源状態

国際的に合意された資源状態に関する情報はない。我が国では、主分布域を対象に、資源量推定を目的とした目視調査が行われてきた。瀬戸内海においては、1976～1978 年にかけて主としてフェリー上から目視調査が実施され、その結果 4,900 頭との推定値が得られた (Kasuya and Kureha 1979)。また、伊勢湾・三河湾では、1991～1995 年にかけて小型調査船による目視調査がライトランセクト法に基づき実施され、1,046 頭 (CV=28.0%) との推定値を得て

いる（宮下ほか 2003）。さらに、大村湾と有明海・橘湾では 1993～1994 年にかけて小型飛行機を用いた航空目視調査が実施され、資源量は各々 187 頭（CV=20.1%）と 3,093 頭（15.7%）と推定された（Yoshida *et al.* 1997、1998）。その後、他の生息域においても航空目視調査が行われ（白木原 2003b）、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域で 3,387 頭（32.7%、調査年は 2000 年）（Amano *et al.* 2003）、瀬戸内海において 7,572 頭（17.3%、2000 年）（Shirakihara *et al.* 2007）との推定値が得られている。

国際水産資源研究所でも、2002 年秋から全国の主分布域において航空目視調査を開始し（図 4、5）、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域で 2,251 頭（39.1%、2005 年）（小川ほか 2013）、伊勢湾・三河湾で 4,620 頭（29.0%、2014 年）（小川ほか 2015）、瀬戸内海で 10,441 頭（15.1%、2015 年）（吉田ほか 2016）、大村湾と有明海・橘湾でそれぞれ 168 頭（39.3%、2012 年）と 3,000 頭（24.5%、2012 年）（吉田ほか 2013）と推定しており、我が国周辺には少なくとも 20,000 頭程度は生息しているものと見込まれる。



図 4. 航空目視調査に使用される小型飛行機



図 5. 飛行機から見たスナメリ（撮影：南川真吾）

近年、資源量推定を目的とした調査が盛んに行われるようになった結果、資源の動向を見るための情報も集まりつつある。瀬戸内海では 1999～2000 年に、1970 年代に実施されたと同様の方法で船舶目視調査が行われ、その結果、生息密度の減少と生息域の縮小が認められた（Kasuya *et al.* 2002）。しかしその後、10 年の間隔を置いて、同様の海域と方法で実施された 2 回の航空目視調査の結果を比較した

ところ、これらの傾向は止まった可能性がある（吉田ほか 2016）。大村湾、有明海・橘湾では、ほぼ 20 年の間隔を置いて再調査された結果から、生息密度の違いは見いだせていない（吉田ほか 2013）。伊勢湾・三河湾では 2014 年の夏季に 11 年ぶりに航空目視調査が行われ、前回は上回る資源量推定値が得られた（小川ほか 2015）。一方、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域で行われた航空目視調査では、東日本大震災前には生息密度の減少は認められなかったものの（小川ほか 2013 年）、震災後の調査では、震災前に比べ資源量の減少が報告されている（白木原ほか 2013）。他の海域も含め、現在の資源水準は中位、横ばいとした。大村湾については、資源量推定値が数百頭程度と小さく、生息環境の変化の影響を受けやすいと考えられることから低位とした。

管理方策

現在、スナメリを対象とする漁業はないが、定置網、刺網による混獲が発生している。混獲個体の資源量推定値に対する割合は、大村湾及び有明海・橘湾において年 1% 程度との見積もりがある（白木原 2003c）。この値は、鯨類に対し経験的に考えられている再生産率 1～4% よりも低い。しかし、計算に用いた混獲個体数と資源量推定値はともに過小に偏っているものと考えられる。資源量は調査線上の全ての個体を見落とすことなく発見するとの仮定のもと推定されており、また全ての混獲個体が計上されていないためである。より偏りのない値の入手に努めるとともに、混獲を減らす努力も必要である。

本種の生息域は、水深 50m 以浅域の発達した遠浅で砂泥質の卓越する水域という地形的特徴を持っている（白木原 2003a）。これらの海域は人間活動が盛んな場所であり、埋め立てや海砂の採取などが古くから行われてきた。スナメリの分布を制限する要因は明らかでないが、これら地形的特徴が関わっている可能性は高い。海砂の採取などが過度に行われれば、生息域の縮小や分断を招く恐れもある。瀬戸内海では海砂の採取による生息域の分断化の可能性が指摘されている（Shirakihara *et al.* 2007）。また、仙台湾から房総半島東岸にかけての海域では、生息域の環境変化に加え、東日本大震災の影響も懸念される。目視調査を通じ、出現状況の変化についても情報を収集する必要がある。

沿岸域では環境変動が外洋よりも激しいものと予想される。また、陸に近接することから、陸上由来の病気に接する機会もより高いものと考えられる。日本周辺の本種に対し免疫機能に関わる MHC 遺伝子の多型の解析（Hayashi *et al.* 2006）によると、他の鯨種に比して多様性が特に低下しているとの結果は認められなかったものの、今後も遺伝的多様性のモニタリングに努める必要がある。

本種はごく沿岸海域に生息しているため古くから人々になじみの深い鯨類であり、水族館での飼育の歴史も長い。かつて国内の 18 園館で飼育されていたが、飼育数は年々減少する傾向にあった（古田 2003）。しかし、2004 年 11 月に水産資源保護法に基づく採捕許可を受けて、学術研究及び教育展示を目的に 9 頭の特別採捕が行われた。その後、研究の

進展に伴い、飼育下出産は計 6 頭となった。スナメリという生き物を間近で観察し、理解を深めることができれば、本種の資源管理に対する社会的関心も高まるであろう。飼育下における学術研究及び教育展示も意義あるものと思われる。

執筆者

外洋資源ユニット

鯨類サブユニット

国際水産資源研究所 外洋資源部 鯨類資源グループ

吉田 英可

参考文献

- Amano, A., F. Nakahara, A. Hayano, and K. Shirakihara. 2003. Abundance estimate of finless porpoises off the Pacific coast of eastern Japan based on aerial surveys. *Mammal Study*, 28: 103-110.
- 石川 創. 1994. 日本沿岸のストランディングレコード (1901 ~ 1993). 鯨研叢書 6. (財)日本鯨類研究所, 東京. 94 pp.
- 岩崎俊秀. 2007-2011. 日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告. Japan Progrop. SM/2007-2011J. http://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/w_document/index.html
- 古田正美. 2003. 水族館におけるスナメリの飼育と生態研究. 月刊海洋, 35: 559-564.
- Jefferson, T. A., K. M. Robertson, and J. Y. Wang. 2002. Growth and reproduction of the finless porpoise in southern China. *Raffles Bull. Zool.*, Supplement 10: 105-113.
- Jefferson, T. A. and J. Y. Wang. 2011. Revision of the taxonomy of finless porpoises (genus *Neophocaena*): The existence of two species. *Journal of Marine Animals and Their Ecology* 4: 3-16.
- 片岡照男・元村良雄・北村秀策・山本 清. 1967. スナメリの摂餌量について. 日本動物園水族館雑誌, 9(2): 46-50.
- 片岡照男・北村秀策・関戸 勝・山本 清. 1977. スナメリの食性について. *In* 鳥羽水族館(編), スナメリの飼育と生態. 49-56 pp.
- Kasuya, T. 1999. Finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829). *In* S. H. Ridgway and R. Harrison (eds.), *Handbook of marine mammals Vol. 6: the second book of dolphins and the porpoises*. Academic Press, London, United Kingdom. 411-442 pp.
- Kasuya, T. and K. Kureha. 1979. The population of finless porpoise in the Inland Sea of Japan. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 31: 1-44.
- Kasuya, T., T. Tobayama, T. Saiga, and T. Kataoka. 1986. Perinatal growth of delphinoids: information from aquarium reared bottlenose dolphins and finless porpoises. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.*, 37: 85-97.
- Kasuya, T., Y. Yamamoto, and T. Iwatsuki. 2002. Abundance decline in the finless porpoise population in the Inland Sea of Japan. *Raffles Bull. Zool.*, Supplement 10: 57-65.
- 木白俊哉. 2012-2014. 日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告. Japan Progrop. SM/2012J-2014J. http://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/w_document/index.html
- 宮下富夫・古田正美・長谷川修平・岡村 寛. 2003. 伊勢湾・三河湾におけるスナメリ目視調査. 月刊海洋, 35: 581-585.
- 水江一弘・吉田主基・正木康昭. 1965. 九州西方海域小型歯鯨類の研究 -XII. 長崎県橘湾で捕獲されたスナメリについて. 長崎大学水産学部研究報告, 18: 7-29.
- 中村清美・榊原 茂・Grant Abel・立川利幸・水嶋健司・和田政士・土井啓行・菊池拓二. 2003. 山口県及びその周辺海域で確認されたスナメリの漂着や混獲などに関する報告. 日本海セトロジー研究, 13:13-18.
- Hayashi, K., H. Yoshida, S. Nishida, M. Goto, L. A. Pastene, N. Kanda, Y. Baba, and H. Koike. 2006. Genetic variation of the MHC DQB locus in the finless porpoise (*Neophocaena phocaenoides*). *Zoological Science*, 23:147-153.
- 小川奈津子・吉田英可・赤木 太・勝俣 浩・酒井 孝・長谷川修平・古田正美・服部 薫・加藤秀弘. 2013. 飛行機目視調査によるスナメリの個体数推定 (2) — 仙台湾～東京湾, 伊勢湾・三河湾, 瀬戸内海一. 第 29 回日本霊長類学会・日本哺乳類学会 2013 年度合同大会講演要旨集, 125p.
- 小川奈津子・吉田英可・古田正美・加藤秀弘. 2015. 伊勢湾・三河湾におけるスナメリの生息数 — 2014 年夏季航空目視調査の結果一. 平成 27 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 39p.
- 大隅清治. 1998. スナメリ. *In* 水産庁 (編), 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. (社)日本水産資源保護協会, 東京. 264-265 pp.
- 白木原国雄. 2003a. 日本におけるスナメリの分布. 月刊海洋, 35: 538-543.
- 白木原国雄. 2003b. 日本におけるスナメリの個体数・分布把握のための広域目視調査. 月刊海洋, 35: 575-580.
- 白木原国雄・中原史生・篠原正典・白木原美紀. 2013. 東日本太平洋側沿岸域におけるスナメリの 2012 年の分布と個体数. 平成 25 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 78p.
- 白木原美紀. 1993. 長崎沿岸海域におけるスナメリの生活史に関する研究. 長崎大学大学院海洋生産科学研究科学学位論文. 137 pp.
- 白木原美紀. 2003c. スナメリの生物学的特性. 月刊海洋, 35: 554-558.
- Shirakihara, K., H. Yoshida, M. Shirakihara and A. Takemura. 1992. A questionnaire survey on the distribution of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in Japanese waters. *Mar. Mamm. Sci.*, 8: 160-164.
- Shirakihara, K., M. Shirakihara and Y. Yamamoto. 2007. Distribution and abundance of finless porpoise in the Inland Sea of Japan. *Mar. Biol.*, 150: 1025-1032.
- Shirakihara, M., A. Takemura and K. Shirakihara. 1993.

Age, growth, and reproduction of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in the coastal waters of western Kyushu, Japan. Mar. Mamm. Sci., 9: 392-406.

Shirakihara, M., K. Seki, A. Takemura, K. Shirakihara, H. Yoshida and T. Yamazaki. 2008. Food habits of finless porpoises *Neophocaena phocaenoides* in western Kyushu, Japan. J. Mamm., 89: 1248-1256.

Yoshida, H. 2002. Population structure of finless porpoises (*Neophocaena phocaenoides*) in coastal waters of Japan. Raffles Bull. Zool., Supplement 10: 35-42.

Yoshida, H., Higashi, N., Ono, H., and Uchida, S. 2010. Finless porpoise (*Neophocaena phocaenoides*) discovered at Okinawa Island, Japan, with the source population inferred from mitochondrial DNA. Aquatic Mamm., 36: 278-283.

Yoshida, H., M. Shirakihara, A. Takemura and K. Shirakihara. 1994. Development, sexual dimorphism, and individual variation in the skeleton of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in the coastal waters of western Kyushu, Japan. Mar. Mamm. Sci., 10: 266-282.

Yoshida, H., K. Shirakihara, M. Shirakihara and A. Takemura. 1995. Geographic variation in the skull morphology of the finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* in Japanese waters. Fish. Sci., 61: 555-558.

Yoshida, H., K. Shirakihara, H. Kishino and M. Shirakihara. 1997. A population size estimate of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, from aerial sighting surveys in Ariake Sound and Tachibana Bay, Japan. Res. Pop. Ecol., 39: 239-247.

Yoshida, H., K. Shirakihara, H. Kishino, M. Shirakihara and A. Takemura. 1998. Finless porpoise abundance in Omura Bay, Japan: Estimation from aerial sighting surveys. J. Wildl. Manage., 6: 286-291.

Yoshida, H., M. Yoshioka, S. Chow and M. Shirakihara. 2001. Population structure of finless porpoises (*Neophocaena phocaenoides*) in coastal waters of Japan based on mitochondrial DNA sequences. J. Mamm., 82: 123-130.

吉田英可・小川奈津子・和田政士・立川利幸・中村清美・永谷浩・南川真吾・宮下富夫・加藤秀弘. 2013. 飛行機目視調査によるスナメリの個体数推定 (3)―有明海・橘湾, 大村湾―. 第 29 回日本霊長類学会・日本哺乳類学会 2013 年度合同大会講演要旨集, 126p.

吉田英可・中村清美・相磯智美・赤木 太・石川 恵. 2016. 瀬戸内海におけるスナメリの分布と個体数. 平成 28 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 53p.

スナメリ (日本周辺) の資源の現況 (要約表)

資 源 水 準	中位 (大村湾系群は低位)
資 源 動 向	横ばい (東日本大震災の影響が懸念される仙台湾から房総半島東岸にかけての海域及び資源量推定値の小さい大村湾では要注意)
世 界 の 捕 獲 量 (最近 5 年間)	詳細は不明 各地で混獲あり
我 が 国 の 捕 獲 量 (最近 5 年間)	商業捕獲はないが混獲あり (15.0 頭 / 年: 2010 ~ 2014 年の国際水産資源研究所とりまとめによる)
管 理 目 標	現在の資源水準を維持 (仙台湾から房総半島東岸にかけての海域ではもとの水準への回復)
資 源 の 状 態	仙台湾～東京湾系群のうち仙台湾～房総半島東岸: 2,251 頭 (CV=39.1%, 2005 年) 伊勢湾・三河湾系群: 4,620 頭 (29.0%, 2014 年) 瀬戸内海～響灘系群のうち瀬戸内海: 10,441 頭 (CV=15.1%, 2015 年) 大村湾系群: 168 頭 (39.3%, 2012 年) 有明海・橘湾系群: 3,000 頭 (24.5%, 2012 年)
管 理 措 置	水産資源保護法の対象種 商業捕獲は禁止
管理機関・関係機関	農林水産省
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—